

# 新年



## 空色も花と染めなす初日かな

季語・初日

元旦の日が昇ると空は花と染まって美しく、よい新年を迎えた。今年もつつがなく過ごしたいものだ、井月さんの願いがこもっているような句。井月さんには正月を詠んだ句も多い。

## 紐を解大日本史や明の春

季語・明の春

尊王の志のあった井月さんの若いときの作。「大日本史」は水戸藩徳川光圀の命により一六五七年に着手した歴史書で、幕末から明治にかけて大きな影響を与えた。この頃、新年の読書始めには古典の冒頭を朗読する習わしがあったという。

## 世の塵をぬぐうて句ふ初日かな

季語・初日

新年を迎え、昨年までの取るにたらないちりあまたを一切ぬぐってくれるように、朝日が映える元旦である。年が変わればあらゆるものが清められ、あらたまるといった日本的な習慣が詠まれている。

## 屠蘇の座や立まはる児の姉らしき

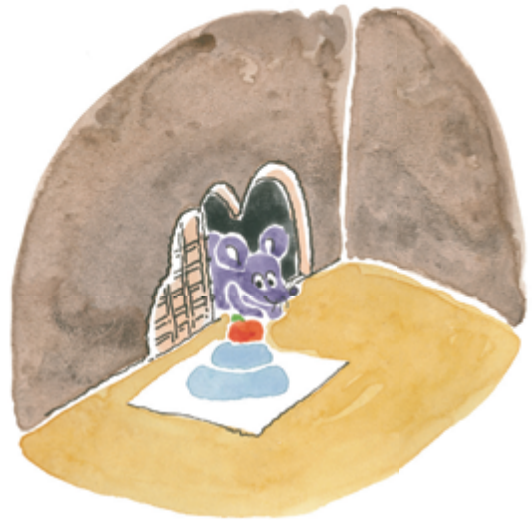
季語・屠蘇

新年の最初に飲む祝いの座で一人前に働く娘をみて、すっかりお姉さんらしくなったなあと目をみはる井月さん。井月さんのご年始回りは三月頃まで続いている。迎え入れてくれる家も多いのだ。

## 万歳の笑貌をかくす扇子哉

季語・万歳

三河万歳の演者が、一年の初めに家内安全を祝って門に立ち、鼓と祝い歌に合わせて舞った。今の愛知県の三河地方から広がった三河万歳は、ことほぎとこっけいな掛け合いを演じて伊那あたりまでできていた。



## 嫁が君いたづらものと云はるゝな

季語・嫁が君

嫁が君とは鼠のこと。正月三が日の間はそう呼んだ。鼠は農作物を荒らす有害動物だが、一方で大黒さまの使いともみなされ、三日に米や餅を鼠に供えて「鼠の年取り」とする風習も伊那地方にもあった。

## 年々や家路忘れて花の春

季語…花の春

昔の暦では、新年と春がほとんど同時にきたので、春という字を新年の意に用いることが多かった。井月さんは伊那に流浪して二〇数年たった。年々家郷への路を忘れてまた春を迎えたのである。

★俳句の解釈は、竹入弘元「井月の魅力―その俳句鑑賞―」他を参照した。



井月さんは、「俳句の言葉は自然と水の流れるようにすらすらと安らかであるべきですよ。木をねじ曲げたようにごつごつ作るべきではないですよ。良い句にしたいと思ってはいけな、ただやすやすとつくるべきですよ」と教えています。言葉の流れを大切にと言っているのです。

井月さんの句は、どの句も声を出して読むとリズムがありますね。俳句は、季語という句の季節を示すために詠み込まれた五・七・五の形へ、心にあふれてきたものを声に発するものだと、語っています。井月さんの俳句の中にある心の声

が皆さんに届きましたか。

# 幕末維新ばくまついしん — 新しい時代を迎えてむか —

灰あに書く西洋文字せいやうぶんじや楯明りたてあかり

★楯たて—たぎぎ

幕末から明治にかけて、井月さんが身を寄せたころの伊那谷は大変な時代でした。強い風が荒波あらのなみをいっそう逆立てるのように、いろいろな出来事できごとが起きました。

政治から遠ざかっていた天皇を表舞台おもてぶたいに出し、日本各地に幕府を倒す勤王きんのうとうばく倒幕の動きが公然と起きました。天皇を押し立てて二六〇年間続いた政治体制を変えようと動き出したのです。伊那もその大きなうねりの中に飲み込まれていたのです。

横浜港の開国に反対して、水戸の浪士ろうしたち一〇〇〇人が伊那路を通過しました。太平の世の中に





慣れていた伊那の人々の度肝を抜きました。

伊那にも、勤王攘夷という外国を排斥して「新しい古」を求める平田学派といわれる人たちが多く誕生しました。知識もあるわりあい裕福な農民層の人たちで、幕府政治の行き詰まりをどうにかしたいと思っている人たちです。倒幕運動に飛び込んだ人たちもいます。

一般の人たちも不安な世相を敏感に感じていました。世の中はどうなるかわからないが、さりとてどうしていいのかわからなかったのです。

江戸幕府の最後の年、伊勢神宮のお札があちこちに天から降ってきたと大騒ぎになりました。「ヤッチョロ、ヤッチョロ」と、若者も年寄りも、男性も女性も、狂ったように仮装姿で踊り歩きました。男性は女装、女性は男装をしたといえます。日常生活をひっくり返すような行動をとったのです。騒ぎの始まった東海地方では「ええじゃないか」といわれますが、伊那地方では「ヤッチョロ踊

り」といいました。

世の中が大きく変わろうとしていたのです。

薩摩（鹿児島県）や長州（山口県）が中心となっ

た新政府軍が、幕府軍を次々と降伏させ、一八六七

（慶応三）年、ついに王政復古の大号令によって明

治の新政権が誕生しました。けれど、その後も幕

府側の最後の抵抗、戊辰戦争は続いていました。

井月さんの長岡藩は、勤王派と佐幕派とが激しく

争っていました。最後に新政府と戦う道を選ん

だのでした。

井月さんは、長岡藩の存亡をかけた新政府軍と

の戦いに参加しませんでした。血で血を洗う戦い、

人と人、同じ日本人同士で戦争をすることのむな

しさを感じていたのかもしれない。伊那を放逐

し俳句の道をひたすら求めていたのです。

伊那の高遠藩は、幕府側から新政府の勤王派に

転じて、井月さんの故郷、長岡藩を滅ぼすために

大勢の兵を送ります。捨てたといえ長岡は生ま

れ育ったところ、そこを伊那の人たちが攻撃した  
のです。井月さんは何も語れず、重い口はますま  
す閉じていきました。

長岡藩は破れ、城も町も焼かれて壊滅しまし  
た。東北や北海道の戦いでも新政府軍が勝利をお  
さめ、幕府側の最後の抵抗は終わったのです。

明治という新しい時代がやってきて、攘夷を唱  
えていた新政府は、あつというまに開国に踏み切り  
ました。井月さんの周りにも、いやおうなく西洋  
文化の波が押し寄せてきたのです。

### 灰に書く西洋文字や楯明り

囲炉裏の灰に、くべたまきの明かり火でローマ字  
か算用数字を書いているのは、井月さんなのでしょ  
うか。

さらに新しい時代は、井月さんを巻き込んで大  
きく動き出すのです。